

金光教の声

平成二十三年一月〜三月放送分

NO.394

【おへん】

年頭放送 毎日の今	1	私こそありがとう	29
行つてきます！	5	黒い卵	33
雪かきの心	9	神様の手の中で	37
天狗の弟子入り	13	神心と人心	41
天ぷら屋 大繁盛の理由	17	認知症の祖母と暮らして	45
麦ごはん、ポロポロ	21	親の祈り、神様の祈り	49
誰もが先生	25		

年頭放送 「毎日の今」

金光教教務総長 佐藤光俊

皆様、新年明けましておめでとうございませう。

新たな年の初めを迎えて、大人も子どもも、誰しもが、おのずと、すがすがしい、真新しい思いになるのも、考えてみると不思議なことではありませうか。

一日一日の積み重ねが、一月となり、一年となるのですから、その最初の日を迎えたといつても、五十歳の方は五十回、八十の方は八十回目のお正月を経験しておられますのに、誰一人として、もう何回もお祝いをしたから、今年は止めようとは申しませう。年齢を重ねるのはつ

らい、苦しいと思つてゐる人たちでも、やはり、元日を迎えると、一種の晴れやかな気分がもたらされ、新しい気持ちを覚えさせるものなのですよ。

私は、以前、ひと月余り入院して、治療を受けたことがあります。七月末のある日の夜、少量の吐血があり、電話で主治医に連絡したところ、「今は大したことはないようでも、今夜中に急変する恐れがあるから、すぐに救急車で来て下さい」とのご返事で、戸惑いながらも、緊急入院することとなりました。

病院では、何人もの医師と看護師さんたちが待ち受けておられ、初めて事柄の重大さを実感したのでした。内視鏡での治療を受け、その後、何度かの検査と治療を受けることになりま

す。

おかげで何の痛みも苦痛もなく、入院した日に応急処置をして出血は止まりましたが、翌日には本格的な治療を受けて、その後の二日間は点滴のみで絶食となりました。ひどい空腹感はないのですが、脱力感は始終つきまといます。

治療からやつと三日目に、コップに三分の一ほどの重湯とお白湯さゆが出た時、「これが食事か…」と思う程のわずかな飲み物でしたが、恐る恐る

口にして、含んで味わった時の感激は今でも忘れられません。今までに味わった基準では計り知られぬ味わいなのです。ただおいしいというのとはまた違って、味わい深い、しかも、飲み込むとすぐに体に充足感が生まれ、満たされる喜びと共に、力が身に付くともいえるのです。

ようか。二口、三口で終わりなのですが、じつと口に含んで、味わい尽くす思いになります。最後に、お白湯を頂いたのですが、ただのお白湯にも深い味わいがあることを初めて知りました。

今まで、好物の品やご馳走と言われる物も随分頂きましたが、それらとは比べようもない、神様の贈り物と言うてもよい程の深い味わいを感じたのです。

この時、私が頂いた重湯といえ、材料は普通のお米を少々と、ごくわずかな塩分でしょうが、普段は、主食として、その何倍ものお米をご飯として、何とも思わずに食べていたことを思うと、今までの食生活は、何とお粗末な食べ方であったのかと、身の程を恥じ入る思いがし、

改めて口に出る物がある喜びともったいなさ、食物のありがたさを痛感させられたのです。

その後、重湯から、二分がゆ、そして三分、五分、七分がゆと進み、やっと全がゆになりました。しかも、それぞれが二日間続き、二週間ほどして、初めて白米のご飯に到達するのです。ですから、五分がゆになる頃には、朝昼晩と毎食のことですから、最初の感激はいつしか消えて、「いったい、おかゆがいつまで続くのか」と不満が芽生え始めるのです。早く、普通のご飯が食べたい。その思いが次第に膨らみ、口にも出ます。同時に最初の重湯を頂いた時の感激も思うのですが“欲望”というものは誠に扱にくいものであることをも知りました。こうして、ひと月も経過した九月初旬のある

日、いよいよ退院の日を迎え、お世話になった方々にあいさつを済ませて、玄関を出ました。

そして、十メートルほど歩いて、迎いの車に乗り込むまでのわずかな時間に、太陽のまぶしい輝きと共に、冷房の中で季節を忘れていた体が、次第に汗ばむのを感じた時、生き返ったという感覚が全身を包みます。

夏ではあっても、外気の暑い空気が、全身を包み、生きた空気を思い切り吸い込んで、五体が満たされる思いがしたのを忘れられません。時に、かすかに吹く風にも、天地が生きているという感動を覚えたのです。今にして言えば、かつてこれ程確かに、わが身を天地の生きたいのちの一部として、見出した経験はなかったと思います。

ある時、金光教の現教主・金光平輝様は、次のような言葉を伝えておられます。

「今日も明日もあさつても、みな今月今日に

なります。すべてお世話になるものに礼を言う心を土台にして、ここから先の毎日の今を大切に、おかげを頂かれますよう、祈つてやみません」

ここには、人間の生き方にとって、極めて大切な意味が、さりげない言葉で示されているように思います。先程の、病院での二つの感激と重ね合わせて、このお言葉を思うのです。

「毎日」という言い方で済むところを、わざわざ、「毎日の今」と言われているのには、日常の毎日の時間の中に、ふと、神様に通じる瞬間が誰しにもあり、その瞬間を、「毎日の今」

と言われ、そして、「今月今日」とも言われて、そのことへの気付きを促されているのだと頂いております。

「今日も明日もあさつても、みな今月今日になります」

「すべてお世話になるものに礼を言う心を土台にして、ここから先の毎日の今を大切に」

どうぞ本年も、皆様方にとって、かけがえない、「毎日の今」という時の発見でありますよう、祈りを込めて、新年のごあいさつと致します。

行つてきます！

工藤由岐子

「行つてきまーす！」。

朝、学校に行く子どもたちを「行つてらっしゃい」と見送ります。特別なことではないかもしれないませんが、私にとってありがたいと思える瞬間です。

今日は、息子、直人の話をさせて頂きます。直人は幼い頃、アトピーがひどく、顔や体に湿疹が出来やすい子でした。特に夜寝る時は、体温が上がるからか、かゆくてたまりません。爪でかくと血が出てしまいます。私が背中をかいてあげると、気持ちが良くなって、どうにか

眠りにつけるといいう日々でした。

幼稚園に入つて、アトピーはマシになったものの、頻繁に風邪を引くようになり、その度に、ぜんそくの発作を起こすようになりました。体力を付けようと水泳を始めましたが、すぐに治るものではありませんでした。お医者さんには「とにかく風邪を引かさないことです」と言われるのですが、集団生活の中ではそうもいきません。遠足や運動会のシーズンは、いつも調子が悪くなり、参加は出来ても、行事を終えた後は、すぐにダウン。夜にぜんそくの発作が出ます。体を横にするより、座った姿勢で寝る方が楽だと言います。しかし、それでは熟睡が出来ませんので、寝苦しい夜が続きました。

そして小学校に入つてからも、よく休みまし

た。欠席する場合は、その理由を連絡ノートに書いて担任の先生に届けるのですが、毎度毎度、同じことを伝えるのがつらくなり、つい私の心情まで書いてしまいました。

「直人のお友達は皆、元気に登校出来ているのに、うちの子どもは、ちゃんと学校に行くことが出来ません。苦しそうな姿を、そばで見ているのも胸が痛みます…。代わるものなら私が代わってあげたいのですが…」

すると、先生は次のように書いて励まして下さいました。

「病気はつらいでしょうね。でもその代わりに、自分が苦しんだ分、人にも優しくなれるのではないのでしょうか。人の痛みも分かっただけられる子どもさんだと思います。これは学校で

学ぼうと思っても、そう簡単に学べるものではありません」

先生の言葉が胸に響きました。「悪いことばかりではないんだ」と思いました。

翌朝、回復した直人が、ランドセルを背負って「行ってきまーす！」とうれしそうに出掛けた時は、親として一番ホツとするのです。

子どもを見送りながら、ふと自分の昔のことを思い出しました。

「私の母も、いつも見送ってくれたなあ…。手を振られると、ちよつと恥ずかしかったりもしたけど。途中、忘れ物に気付いて取りに帰ったら、母はいつも、神様をお祭りしている所で、拜んでくれていたなあ」

今も、その一生懸命お祈りしてくれていた、

母の後ろ姿が記憶に残っています。

さて、そんな直人が中学校に入ってからはおかげで、随分ぜんそくが良くなりました。これまでの反動も出てか、野球部に入りスポーツに打ち込むようになりました。うまくはなかったのですが、本人の思い入れが通じたのか、三年生になったある日、私に「背番号一番をもらったで！ 明日練習試合やねん。背中にゼッケンを縫い付けといて！」と、それを渡された時には、ビックリしました。翌日の試合には、家族中で応援に行きました。結果は、一対〇で負けましたが、緊張しながらも一生懸命投げ切った直人の姿に、思わず涙が出ました。ところが一方で、子どもの通う中学校は当時大変荒れていて、物が壊されたり盗まれたりする

ことが、毎日のようにありました。そんな中で、クラスメートのお弁当が、次々と食べられてしまふという事件が、何日も続きました。偶然にも、友達のお弁当が男子生徒に食べられているのを直人が見掛けて、すぐに先生に言いに行つたそうです。ところが、それを見ていた誰かが、本人に知らせたのでしょうか。翌日、直人の所まで来て、胸ぐらをつかみ「お前、先生にチクつたやろ！」と迫ってきたそうです。休憩時間の度にやってくるので怖くなって、早退してしまいました。

翌朝、登校を渋る直人に「勇気を出してよう言いにいったなあ」と言いつつも、内心「えらいことに巻き込まれてしまった」という気持ちの方が勝り、私まで憂うつになっていました。

肩を落として家を出ようとすする直人に、主人が

になりました。

「怖がらずに、堂々としてたええんちゃうか。お前は間違ったことしてないのやろ」と言いました。私は「どうぞ全てが良い方向にいけますように」と祈るばかりでした。

学校を終えた直人が、安堵した様子で帰って来ました。「担任の先生が説得してくれて、ち

私は、きつと神様も、親のような思いで、たとえどんな問題が起こってきても「どうか、くじけることなく乗り越えてほしい。」と私たちのことを願って下さっているような気がします。その願いの中で、私も子育てをしながら、神様に育てて頂いているのでしよう。

やんと解決したよ。もう元通りになったわ」。それを聞いて主人も私も、胸をなで下ろしました。

あれから五年。直人はもう大学生です。ボランティア活動を始めたようで、今日も元気に出掛けて行きました。

私は次の日以来、朝、子どもたちを送り出す時には「どうか、道中事故や過ちのございませんように」。友人関係が都合良くいきますように」と、母が昔、私のことを願ってくれていたように、いつそ心を込めてお祈りするよう

雪かきの心

三浦 義雄

私の郷里は北陸地方にあり、冬には必ず雪が降ります。県境に連なる三千メートル級の山々に積もった万年雪は、清らかな雪解け水となり、季節を問わず豊富な水を恵んでくれています。

近年は暖冬のせいか、それほどでもありませんが、私が小さな頃には、平屋の家が埋もれるほどの雪が降ったものでした。近くのお寺の屋根からスキーをしたり、屋根から落ちて山のようになつた雪に穴を開けてかまくらを作ったり、友達と雪玉をぶつけ合つて遊んだのを、今でもよく覚えています。

しかし、子どもの頃、遊び友達であつた雪も、大人になると、厄介なもの、嫌なものになります。主な生活道路は除雪車が降り積もつた雪を取り除いてくれますが、外に車を止めている人は、出勤前、雪が積もる度に、車に積もつた雪を落とし、道路まで除雪しなくてはなりません。特に、体の不自由な年老いた人にとって、雪かきをするのは、実に大変なことです。でも、それが雪国では当たり前の生活なのです。

私たち家族が、私の郷里にある教会で生活をするようになって、今年で十一年になります。雪が積もれば、教会の駐車場の雪かきをしなくてはなりません。大きなスコップで、雪を用水路に運び入れたり、駐車場の周囲に積み上げるのですが、全体を除雪するのに一時間以上かか

ります。

私は雪国育ちですから、冬に雪かきをするのは当たり前です。けれども妻は、温暖な瀬戸内地方で生まれ育ち、雪に囲まれた生活は初めてです。一緒に雪かきをしてくれるのはありがたいのですが、何年もするうちに、だんだん、嫌になってくるのではないか気がかりでした。

特に昨年の冬は、例年になく、たくさんの雪が降りました。夜、寝る前に奇麗に除雪しても、朝、三、四十センチ積もっている日が結構あり、一日に何度も雪かきをしなければなりませんでした。

そんなある日、妻は「雪が降る前日の夜の、しーんと張りつめた空気が大好き。雪が降ると、玄関を開けて『あ、雪が降った』とうれしく感

じるの。『雪って、どうしてこんなに降るんだろうなあ』とワクワクするわ。なぜか雪が嫌いなれなくて…」と、うれしそうに話してくれました。妻が、いつまでも子どものような心で、楽しそうに雪かきをしてくれるのは、本当にありがたいことです。

ところで、雪かきをする時、いつも思い出すのは、十一年前、妻と初めて一緒に雪かきをした時のことです。

当時、隣のビルの一階に喫茶店があり、時折、教会の駐車場の一部を無料で使ってもらっていました。それで私は、「喫茶店のお客さんが使う三台分くらいは、喫茶店の方が除雪すればいいだろう」と考え、雪かきをしないで、そのままにしておきました。

ところが、妻はそこも雪かきをしようとするのです。私は「そこは喫茶店で使っているから、そのままにしておけば、自分でするんじゃないか？」と言いました。

すると妻は「いいじゃない。してあげれば向こうも助かるし、それに私、雪かきが好きだし」と、楽しそうに、黙々と雪かきを続けました。

「三台分でも雪かきをしない方が楽なのに……とも思いましたが、私も一緒にしました。そして、駐車場全部の雪かきを終えた時、私はさすが嬉しい喜びで心が満たされているのに気付いたのです。

金光教祖は「農業する人は、自分の田の水の様子を見に行ったら、人の田の水も見てあげれ

ば、人もまた自分の田の水を見てくれる。互いに親切にし合えば、人も喜び、神もお喜びになる」とおっしゃっています。

自分さえ良ければいいという思いを越えて、お互いに親切にし合えば、人が喜ぶだけでなく、神もお喜びになると言われるのです。

私は、小さな頃から何度となく雪かきをしてきましたが、その時初めて「ああ、そうなんだ。これが雪かきの本当の喜びなんだ」と思わされました。

それはきつと「お参りされる信者さんのために」というだけではなく「教会とは関係ない見知らぬ人のために」という思いを神様は喜んで下さり、そんな神様の喜びで私の心が満たされたからでしょう。

私は、雪が積もれば雪かきをするのは当たり前前と思ってきました。とはいえ、実際に何度もするのは大変ですし、特別の報酬がもらえるわけでもありません。ですから、「出来るだけ余分なところはしないで、自分が使うところだけすれば良い」と考えていたのです。

しかし妻は「たとえ、人から評価されなくても、報酬がなくても、自分以外の人も助かるのだから、余分に雪かき出来るのはありがたい」と思っていました。

妻が教えてくれた「雪かきの心」は、私が気付かずに持っていた「自分さえ良ければそれでいい」という利己的な思いをとかしてくれたように思います。そして、私の中に芽生えた「雪かきの心」によって、雪かき仕事は思いもかけ

ない喜びをもたらしてくれたのでした。また、それ以来、喫茶店の方と親しく言葉を交わすようになったこともありがたいことでした。

それから、十一年。私は、数年前から腰を痛め、それまでのように素早く、力強く雪かきが出来なくなりました。しかし、いつまでも「雪かきの心」を忘れず、楽しく、ありがたく、雪かきを続けていきたいと願っています。

天狗の弟子入り

岩崎弥生

二〇一〇年、一月五日、朝五時四十分。外の空気はキーンと冷え、空を見上げるとまだ星が光っています。教会では、毎日朝のお祈りがあり、神様に新しいいのちを頂いたお礼と今日一日のお願いに、信者さんがお参りしています。

その日の朝、単身赴任で静岡に来ていた秋山さんの姿が久しぶりにありました。秋山さんは、新年のすがすがしさとほらはらに、暗く固い顔をしていました。

気になって秋山さんに話を聞くと、現在担当しているリース部門の業績が悪く、会社として

はリース事業からの撤退も考えており、一月中にその結論が出るということでした。

もし撤退となると当然自分の居場所はなくなり、リストラということになります。そこで秋山さんは居ても立つてもいられず、仕事始めから朝参りをして神様に道をつけて頂こうと思いついたそうです。

秋山さんは、これからの仕事のこと、東京に残してきた妻や小学校と幼稚園に通う娘たちの将来のことを考えると、不安が募るばかりでした。入社して十六年間、リースの仕事一筋で頑張ってきた秋山さんは、突きつけられた現実の厳しさに、自分はもうどうしたらいいのか、何を願っていたのかが分からなくなっていました。

私は「そうでしたか、秋山さん。それは不安

になりますよね。まずは、自分がどうすべきか、願いがはつきりするよう神様をお願いさせて頂きましょう。そして、今受け持つている仕事を一生懸命やることに努めましょう」と秋山さんに話し、一緒にお願いさせて頂きました。

そうして迎えた一月の末、いよいよ会社の方針が決まりました。残念なことに、リース部門の撤退が決まり、営業所は三月末で閉鎖されることになりました。毎日朝参りをし、今日まで一生懸命取り組んできた秋山さんの思いを考えるとつらくなりました。がっかりしている秋山さんを見ていて、ふと私は『天^{てんぐ} 狗の弟子入り』の話を思い出して、秋山さんに話しました。

ある人が天狗の弟子にしてほしいと頼んだところ、天狗が「それなら私の言う通りにするか」

と聞いてきました。その人が「はい」と答えると天狗はその人を抱えてサツと飛び上がり、崖の上の高い松の木に連れて行きました。

「では今、松の木につかまっているが、その右手を離せ」と天狗が言いました。その通りにすると、今度は「左手を離せ」と言うので「私はこの手を離したら、谷底へ落ちてしまいます」と、その人が答えたところ「それでは私の弟子には出来ぬ」と、天狗が悲しそうに言ったというお話です。

その人は手を離したら落ちてしまうと自分で決めてかかっていた。神様への願いも同じです。神様をお願いしながら、自分の考えや思惑に捕らわれて神様を信じ切れず手を離せないことがあります。いったいその手で握っている

ものは何でしょう？ お金、名声、自分が大事だと思ってきた生き方、価値観？ 手をぎゅつと握っていたのでは何もつかめません。握ったその手を離し、身を委ねた時、神様が受け止めて下さるんです。神様にお願いしながら、自分であなつたらこうなると初めから決めていませんか？ 右手と左手交互に離しているのなら、ただ苦しいばかりです。両手を離して、神様にお任せしてみましよう、と話をしました。

先程まで思い詰めた顔をしていた秋山さんでしたが、何か思い当たることがあったようで深くうなずいています。

そして秋山さんが「実は私、未払金を催促すること、いつもは電話で済ませていましたが、

に行きました。すると電話で納金のお願いをした時の素っ気ない態度とうつて変わって、担当者が厳しい現状を話してくれ『半年後にはめどを付けたいと思っているの、今日のところは少ないが…』と、現金を渡してくれたんです。

出来ることを一生懸命と言われ、取引先に回収

してきました。それが、現金を渡してくれたんです。それまで回収のことばかり考えていた自分でしたが、このことで取引先の経営がうまくいってこそ、自分の会社の利益につながることを感じました。それから、営業所を一人で任されていたので、初めから集金に行くのは無理と決めていたのですが、神様にお願いして進めていく中で、無理ではなかった。そして、思わぬ展開になったということがありました」と話してくれました。

ていたのかじっくり考えたそうです。自分は今まで真面目に仕事に打ち込んできたつもりだし、それなりに評価も得ていたと思う。ただ、小さな自分の世界で安心してしまい、それが崩れかかった時、どうしたらよいのか慌てふためいてしまった。自分の小さな価値観を離せないでいたのかもしれない、そう素直に思えたそうです。

「この先会社を辞めてどうなっていくか分かりませんが、神様信じてこの状況を受け入れ、新しい世界に飛び込んで行きたいです」と力強く話してくれました。

「奥さんにはそのこと話しましたか？」と聞くと「こんなに厳しい状況の中でも、最近のあなたは変わった。それを見ていたら私も一緒に

頑張ろうと思う」と言ってくれたそうです。

三月三十一日、全ての仕事を終え、秋山さんは東京へ帰って行きました。

奇しくもその日は秋山さんの三十七歳の誕生日でした。深い感慨をもって、東京へ帰る秋山さんには何の迷いもなく、神様の胸に飛び込んで自分の新しい生き方の第一歩を踏み出す晴れとした顔をしていました。「人生をリセットする良い機会を頂きましたとお礼を言っていたのでした。

そして、三カ月後、秋山さんから電話がありました。自動車の部品販売の会社に就職が決まったとのことでした。うれしい、うれしい電話でした。

天ぷら屋 大繁盛の理由^{わけ}

白神紀美雄

私の奉仕する教会にお参りになる方で、六十年以上続く天ぷら屋さんの店主がおられます。

お名前は、四宮明さん。お店の屋号は、「武蔵」。

四宮さんは今年で八十歳になります。

ある日のことです。見たことのない二人が、じーつと四宮さんのお店を眺めていました。四宮さんは不思議に思い、「何しましよー」と声を掛けましたが、二人は「いや、結構です」と言っただけで買おうとはしません。四宮さんは「変な人たちやなー」と思いながらも、気にせずそのまま仕事を続けました。そうこうしていると、

二人は近付いて来て、「おっちゃん、味見してもええかな」と言いました。四宮さんは快く「かまへんよ」と答え、名物の串カツを差し出しました。二人は「うん、おいしいなあ」と顔を見合わせ、「おっちゃん、お店は何時からやってるの?」「年はいくつ?」などと、いろいろと質問をしてきました。四宮さんは「何やこの人ら」と思いながらも質問に答えていると、最後に二人は名刺を差し出しました。その名刺にはテレビ局の名前が記されており、二人はある番組のディレクターだったのです。二人は「おっちゃんの店なら大丈夫や。また改めて取材に来るから、その時はヨロシク」と言っただけで帰って行きました。

二人が帰った後にようやく状況を把握した四

宮さんは「えらいこつちゃ。うちみたいな小さい店より、商店街の中にもっと大きくて立派な店がなんぼでもあるのに：」と思い、商店街の会長さんの所へ走って行きました。早速に事の次第を説明すると「四宮はん、良かったやないか」と会長さんは大変喜ばれ「商店街あげて応援するで」と逆に激励されたのでした。

それから数日後、再びテレビ局の人が来店し「撮影する日が決まりました。まず、お昼に料理の撮影をし、夕方からは芸能人が三人来て、試食の撮影を行います」と言い、打合せは終わりました。

いよいよ本番の日を迎えました。当日は、商店街の人も店を手伝って下さり、店の前は早くからうわさを聞き付けた人々でいっぱいでした。

た。いよいよ撮影のスタートです。大勢の人が見守る中、四宮さんは次々に天ぷらを揚げ、陳列棚はいろいろな天ぷらでいっぱいです。お昼の撮影が終わり、夕方が近付くにつれ、ますます見物客が増えてきました。「よい、スタート」の合図とともに夕方の撮影が始まると、テレビでは何度も見たことのある三人の芸能人が武蔵にやって来ました。三人は天ぷらを試食しながら「おいしー」を連発し大絶賛です。撮影は無事に終わり、お店の正面には番組のステッカーが誇らしげに貼られました。一週間後にテレビで放映され、その翌日からは連日大盛況！

他府県からもお客さんが次々に来て、まさに飛ぶように天ぷらが売れました。ではなぜ、四宮さんのお店が選ばれたのでしょうか。

四宮さんは昭和二十三年に、徳島県から実の父親の弟であり、武蔵の創業者でもある叔父さんの元へ養子に入りました。義理のお父さんは商売に対して厳しく、また、熱心な金光教信者でもあり、若き日の四宮さんは商売の心得はもちろんのこと、生活全般にわたって厳しい指導を日々受けました。その一つの証拠があります。

テレビ放映の打合せの際、ディレクターから「私たちはいろいろなお店に取材に行きますが、個人経営で、更に油関係で、こんなに綺麗な厨房は見たことがありません」と言われたことです。決して広くはないお店で、日々朝から晩まで二百度を超す油で天ぷらを揚げ続けると、店の中は油だらけになります。しかし、四宮さんは油まみれになった冷蔵庫や、天ぷら屋にとつ

ては、いのちともいえるフライヤーやその周辺を、毎日顔が映るようになるまでピカピカに磨きます。

そこには四宮さんが日々“祈り”や“感謝”を大切にしている気持ちが表れています。

毎朝の出勤時にはまず神様にお祈りをします。その次に冷蔵庫とフライヤーに対し「いつもありがとうございます。今日もよろしくお願ひします」と心を込めて祈り、来て下さるお客様に対しても「神様が連れて来て下さったお客様」と思っ一人ひとり心を込めて応対します。そして閉店の時には同じように感謝の祈りをされるのです。更に、お店の近所に住む四宮さんは、寝る前にも再びお店に行き「火事が出ませんように…」と祈ることが日課となっています。

「これをしなかつたら気持ちが悪うて寝られしまへんねん」と照れくさそうに言われます。

天ぷら屋“武蔵”を営んで今年で六十一年。

お客様とのご縁や調理器具を大切にする四宮さんの心にこそ、天ぷら屋“武蔵”大繁盛のワケがあるのでしよう。

「今までで一番うれしかったことは何ですか？」と尋ねると「そうやねえ」と考えながら、二つのことを言われました。

「一つはテレビ番組に出たことやね。今までの苦労や辛抱を神様が褒めて下さったように思います」。

「そしてもう一つは、八十歳の誕生日にお客さんが花の鉢植えをプレゼントしてくれたことやね。何で僕の誕生日を覚えてくれとつたかは分からんけれども、商売のご縁を通しての人の真心がすごくうれしくありがたかった」と教えてくれました。

麦ごはん、ポロポロ

太田章江

皆さん、おはようございます。

皆さんは、麦ごはんを食べたことがありますか？ 最近の健康ブームで、麦や雑穀を一割程白米に混ぜて炊いている方も、たくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。では、麦百パーセントで炊いたごはんを見たことがありますか？

私の六歳の次女は、赤ちゃんの時からひどいアトピーで、お米と卵と乳製品のアレルギーがあります。ですから、お米の代わりに麦百パーセントの麦ごはんを炊いています。

幼稚園の給食には、毎日この麦ごはんを持って行きます。幼稚園では、娘のアレルギーに対応したおかずを、毎回個別で作って下さっていませんが、来年からの小学校では対応してもらえないものも多く、今から心配しています。というのも、十歳の長女も元々アトピーで、小学校の現状を知っていたからです。例えば“卵とじスープ”なら溶き卵を入れる前に一人分のける、ということをしてもらえます。でも、おかずによっては、対応のしづらいものもあるようです。

長女が小学生になった時、毎月献立表が出るのと、栄養士さんとおかずを一品ずつ確認して“食べられるもの”と“対応してもらえるもの”そして“家から持参するもの”に分けました。それをペンで色分けして冷蔵庫に貼り、毎日頭

をひねりました。

例えば、学校給食の定番、コッペパンは食べられないので、家でパンを焼くのですが：パンって結構膨らむんです。「お友達に『いいなく』って言われたよ」と聞いて、みんなより大きすぎちゃいけないなと思って、丸く焼いたパンを二つ持たせたら、今度は「可愛くていいなく」って言われたそうです。通常の給食を食べるお友達との兼ね合いが、本当に難しかったんです。豪華すぎるとうらやましがられますし、素っ気ないと本人が寂しそうで心が痛みます。

私は子どもの時から家族で金光教の教会に参りをしていました。金光教では教会長先生のことを「親先生」と呼びますが、親先生は一人ひとりの抱えている問題を聞いて下さり、

その人の心持ちに応じた助言をして下さいます。私も悩み事や進学、就職などの大きな節目の問題は、親先生にご相談してきました。親先生は私の相談を一生懸命神様に祈って下さり、神様の心持ちで助言をして下さいました。そんな中で、自分という人間の心持ちの小ささに恥ずかしくなったり、神様の全てを包み込むような大きなお心に温かくなったりしました。

私は現在、福岡県内の教会へ嫁いで、金光教の教師にならせて頂きましたが、今でも家族に問題があれば、先生方にご相談をします。特に六歳の次女のアトピーはとてもひどかったので、毎日先生方とお話をせずには耐えられませんでした。

赤ちゃんの頃の次女は、かゆみがひどく、搔

きむしって血がにじみ、顔や体中が真っ赤でし

た。そんな次女と電車に乗っていた時、見ず知らずの方から聞こえるように「お母さんの食生活が悪いとあなるんよ。赤ちゃんが可哀想……」と言われたり、身近な人であっても、アトピーへの誤解が多く、そんな出来事を先生方に話しているうちに、涙がポロポロ止まらなくなることで何度もありました。

その度に親先生が「あんた誰とアトピーの治療するとね？ 人の目を気にしたり、人を当てにせずに、神様と治療させてもらいんさい」とおっしゃいました。

スーパーへ行っても、原材料をチェックすると食べられないものが多く、がっかりして、つい「あれはダメ、これもダメ」と言葉に出して

しまいます。

でも、親先生は「あれは食べれんとか、これは悪いか言いながらも、毎日いろいろな食べ物や頂かせてもらつとるやろう。病気の重い人は、食事が一切出来んで点滴だけということもあるんよ。それを思えば、元氣いっぱい走り回って、おいしそうに手作りのおやつをほおばっている子どもたちを幸せには思えんね？ 毎日のようにカップラーメンやスナック菓子を食べている子どもたちに比べたら、この子たちは幸せばい」とおっしゃいました。

「私から見た可哀想は、神様から見て違うこともあるんだな。親子で食生活に心を込めることが出来るのは、むしろ幸せなことなんだな」と、そこに気付くことが出来た時、体がじわく

つと温かくなってきた、張りつめていた心も溶け出して「今日から親子でもつと心を込めて食事を押ませて頂こう」と改めて思いました。

麦ごはんがポロポロして食べづらいと不足を言う娘にも「今、目の前にある食べ物さんに『ありがとう』がないと、食べられるものが増えていかんのやないね？」と話せるようになりました。

現在アトピーを克服した長女も「あく、このお野菜さんが、えくんえくんしよるよ。お野菜さん頑張つて食べたら皮膚が強くなるけ、アトピーも早く良くなるよ」と、アトピーの先輩らしく応援してくれます。四つも年が離れていると、お姉ちゃんも半分お母さんです。赤ちゃんみたいに食べさせてもらったり、時にはお

野菜交換会をしてもらって、次女も何とか完食することが出来ます。

この二人が大人になった時、きつといつか「アトピーのおかげで」と食物や家族、神様への感謝の気持ちであふれる日が来る。そんな日を楽しみに、今朝も麦ごはんを炊いています。

誰もが先生

清水正道

「老若男女、全ての人が先生です」

これは、私の奉仕する教会にお参りされている中村さんという、八十歳の男性の言葉です。中村さんは、これまでの長い人生の間に何度も転職をしました。

最初は、従業員が二百三十人ほどの自転車工場に就職。次に、従業員が三人の、段ボールで菓子箱を作る作業所に勤め、その次は従業員九人の板金業でした。そして最後は紡績工場の賄いの仕事でした。

いずれもそれまでの経験が全く役に立たず、

しかも仕事の環境も従業員の数も違うので苦勞の連続でした。しかし人間関係の上ではいろいろと勉強をさせて頂くことが出来、後々役に立つ経験を積むことも出来、決して無駄ではなかったと言います。

中でも紡績工場での賄いの仕事は、従業員千三百人の朝昼晩の三食と深夜の食事とを、男性四人、女性六人の十名で作るというもので、勤務時間も五段階に分かれているため、お互いに連絡が行き届かず、トラブルも発生して大変な苦勞が伴いました。

また全従業員の食事を一手に請け負ってのことでですから、責任も重大で、雨の日も風の日も、そして台風がやって来ようとも、遅刻をすることもなく、約十キロの道のりを自転車で通い続

けたのでした。

例えば、深夜の食事は、ご飯を一度に約三十五kgも炊ける釜で三釜、みそ汁を二釜、お茶を一釜作るという作業を、一人で二時間以内に準備します。時間との勝負でもあり、体力的にもきつい作業で、体が小柄で腕力もない中村さんは、「この仕事を続けていけるだろうか」と、最初の頃は自信が持てませんでした。

上司からも、「この仕事が続けられるのか？ 辞めるのなら早く言ってくれ」と毎日言われ、弱音を吐きたくなるころを、一心に神様にお願いしながら歯を食いしばって勤め続けたそうです。

やがてその仕事ぶりが買われて作業長になり、仲間とも打ち解け、職場の雰囲気も明るく

なりました。ところがちようどそのころ、何百人という部下を抱えていた部署の課長さんが、現場である問題を起こしたことの責任から、人事異動で中村さんの下で働くことになったのです。

中村さんは、この元課長さんにどう接したらよいのか戸惑いました。おそらくその方も、これまで経歴を考えるとつらい思いがあったでしょう。

初めはどこかギクシャクして、折角良くなった職場の雰囲気もおかしなものになっていきました。作業長という立場上、「何とかしなくてはいけない」と、中村さんは考え、気の引ける思いはありましたが、思い切ってこの方の正直な胸の内を、膝を突き合わせて聞かせてもら

おうと決心したのでした。

仕事のことや家庭のこと、それこそ何もかも時間をかけて親身になつて聞くことで、徐々に信頼関係が生まれてきました。作業中も親しく声を掛けることを心掛けるうちに、やがて他の仲間との関係もうまくいくようになり、次第に職場に溶け込んでいくことが出来たのでした。

話を聞くといえばこんなこともありましたが、取引先の業者の方が時折食品のサンプルを持って営業に来られます。中村さんが事務室でその説明を聞いていると、どうしても小一時間はかかってしまいます。ギリギリの人数で回っている職場ですから、現場から、「いつまで話しているのか」という不満が出てくるのでした。その気持ちもよく分かるので、仲間には後で謝る

のですが、業者の方との意思の疎通を深めるには、よく話を聞くということが大切なことと思ひ、時間を気にしつつも、話に耳を傾けたのでした。

またある時、他の会社の重役の方々が視察で工場に来られ、特別メニューで料理を用意することになつたのですが、「こんな豪華な料理を、私も食べてみたいなあ」と作業中にうらやましげに言う人がありました。

それを聞いた中村さんは、「こうして上等な食事をする人たちは、私たちの何十倍もの責任があり、苦勞もあるのです。人それぞれ立場や役割があるということを考えましょう」と話したのでした。

その中村さんもやがて定年を迎えました。人

事の方にこれまでお世話になったことへのあいさつに行った時のことです。「引き継ぎは出来ましたか」と尋ねられたので、「仕事上のことは引き継ぎが出来ましたが、出来ないこともありません」と答えました。「その出来ないこととは何ですか」と聞かれると、「人と人との関わり方はそれぞれですので、これだけは簡単に引き継ぐことが出来ません」と中村さんは答えました。

容易に引き継ぐことの出来ない人間関係…。

金光教の教えに「人間を軽く見るな。軽く見たらおかげはない」とありますが、中村さんは常にこの教えを大切にしてきました。

職場に限らず人間関係は難しいものです。人の一面だけを見てねたんでみたり、うらやまし

がったりする。しかし中村さんのように相手の立場を理解するということを大切にすれば、そういう思いも徐々に心の底から消えていくのではないのでしょうか。

世の中には、自分より年下だったり役職が下の人を軽く扱うような人がたくさんいます。しかし、中村さんは老若男女全ての人が先生だと言います。どんな人でも、その人なりの経験や価値観があつて、それを鏡として自分を見直すことで新しい発見が出来るのです。

お互いに尊重し合つて助かつていく道筋を願わせてもらうことが大切だと心掛けて、中村さんは家庭の中でも気配りを忘れないようにと、日々過ごしています。

私こそありがとう

高橋美絵

私は二十一歳の時に、母の実家である福井県の金光教の教会へ後継ぎとしてやって来ました。

育ちは大阪なので、今までは夏休みにしか福井へ来たことがありませんでした。ですから、冬の間中、北陸特有の今にも雨や雪が降り出しそうな重たくどんよりとした雲におおわれた日が続くということは知りませんでした。仲良くしていた友達とも離れましたが、祖母もいるし、友達なんていなくても大丈夫だと思っていました。

でも、近くに友達がいない毎日は、すごく寂しいことだと気付きました。そして、この寂しさに重なるように、冬のどんよりとしたお天気のせいでしょうか、だんだんと気持ちも落ち込んでいき、涙を流す日が多くなっていました。けれど、いつも泣いているわけにはいきません。泣きそうになる時は、「皆、頑張っているんだ。自分だけがつらいわけじゃない」「大丈夫、大丈夫。自分はまだまだ頑張れる」と自分に言い聞かせて、何とか泣くことはなくなりました。しかし、やはり冬になると寂しいのです。

そんな時、一人の友達から電話が掛かってきました。奈美さんです。彼女は一年程心の病気を患い、人に会うことも出来ず、ずっと寝込み、自殺まで考えたくらいひどい状態だったそうで

す。それが少し元気になり、外にも出られるようになった頃に電話をしてきたようです。私が聞いた時は明るい声でした。

彼女は、自分の性格やいろいろな人間関係などから心の病気になったこと、自分のこれまでの思い、今の思いなど、それまで自分の心のため、誰かに話したかったことを毎日少しずつ電話で話し続けてくれました。その間、私は聞き役に徹して、口を挟んだり、意見を言ったりはしませんでした。彼女は、自分が話したかったことを全て話せたことですっきりしたようでした。

こうして毎日私に少しずつ話をしていくうちに、彼女はだんだんと人に頼ること、頑張らないことも悪いことではないかもしれないな

いなあ”と思うようになったようです。病院にも通い、無理しすぎない暮らしぶりに徐々に変わっていきました。

彼女は自分の気持ちが落ち着くと、今度は、私が冬になると気持ちが落ち込み、なかなか晴れないことを知って、心配してくれるようになりました。家族で動物園に行った時、人工の川に足が滑って落ち、靴の中まで水が入って帰りが大変だったとか、階段から落ちて、障子に頭を突っ込んだけども軽傷で済んだとか、今思い返しても笑ってしまうようなハプニングで、息も出来ないくらいお腹の底から笑わせてくれました。電話だけでなく、彼女が家族でハイキングに行った時の写真や、子どもと公園で遊んでいる写真をメールで送ってくれましたが、そう

した一つひとつが私の心を和ませてくれて、落ち込んでいた気持ちも少しずつ晴れていききました。

また私に、趣味を作ればといろいろ勧められました。でも、どれもピンとくるものがなく、始めたとしても長続きしないだろうなというものばかりでした。しかし、ある時、「千羽鶴を折ってみたら」の一言に、それなら私にも出来そうと思い、やってみることにしました。彼女は千羽鶴に私がすごく乗り気になったことに驚きました。でも、これで少しでも私の気持ちが晴れて、寂しい冬を乗り切れればいいかと喜んでくれました。

千羽鶴を折り始めてしばらくすると、彼女の病気が一日も早く治るように、また彼女だけで

なく、問題を抱えたり病気やケガをしている知人のことを神様に祈りながら折っていることに気がきました。そういえば千羽鶴というのは、

入院している人へのお見舞いや、高校野球での応援などで見掛けるけども、それは、折り鶴一つひとつに折った人の思いや祈りが込められていて、それをつなげることで一つの大きな祈りになるのだなと、自分で折ってみて初めて分かりました。

彼女の心の病気が完治するにはまだまだ時間が掛かるかもしれませんが、以前に比べれば外出も普通に出来、他人と接することも出来るようになったそうです。

ある時、彼女のご両親から、「娘が元気になってきた。ありがとう」と、丁寧にお礼を言わ

れました。

でも、元気になったのは私も同じです。

友達とはいえ、遠く離れて暮らしていた二人の心は寂しいまま、つらいままにいたのです。

その二つをつないだのは奈美さんからの一本の電話でした。彼女の話を聞き、寄り添うことで、彼女の心が少し広がり、その広がりが私の心に新しい息吹を入れてくれました。だから空模様に変え泣いていた不安定な心の私が、気が付けば人のことをも祈れるようになっていたのです。

「友達なんていなくても平気」と思っていたことが、やっぱり間違いだつたと気付かせてもらい、友達存在はすごく大切なんだと改めて教えられました。

北国の雪は静かに降り積もります。確かに厳

しくもあります。しかし、雪はその中にいる者たちをじつと暖かく包み込んでくれるのです。神様が私たち二人の、心の行き交いをじつと見守り包み込んで下さっていたのでしよう。私の方こそ、「ありがとう」と言いたい。そう思える自分がうれしくもあります。

黒い卵

増田誠夫

おはようございます。増田誠夫と申します。

東京都八王子市で生活いたしております。

さて、私どもの日常の中では、時に予想もしていなかったこと、人生の中で思ってもいなかったこと、まー大抵の場合、額にしわを寄せる、といったことが多いのですが、今風に言うと思定外なことが起きてきてアタフタすることがあります。

三年ほど前のある日、六十歳にして人生初めての入院、手術という事態が私の身に起きました。これまで虫歯や結膜炎などでお医者さんの

手を煩わせる程度のことはありませんが、ありがたいことに、まあ、元気な方だったんですね。それがおおよそ一カ月もの間、病院のベッドで過ごすことになり、初めてお見舞いを頂く立場となりました。

それは突然何の前触れもなくやって来ました。腹部に異様な痛みを感じたのです。強烈な力で締め付けられた、とでも申しましょうか。息も出来ず声も出ず、食べた物が逆流する。しばらくするとフツと治まる。やれやれと思うとまた発作が起こる。

初めて体験する状態でしたので、不安な気持ちに包まれましたが、ともかくも神様にお祈りをしてから近所の医者に行きましたが「大きな病院で検査をしてもらおうように」と紹介状を渡

されました。市内でも評判の大病院ですから、
だいぶ待たされるのではと内心思っておりまし
たが、準急患扱いであまり待たずに血液検査、
エコー検査などいくつかの検査をして頂き、胆
石による胆たんのう嚢炎、それも重症、と診断され
ました。

入院して更に検査を重ね、胆嚢を全部摘出す
ることに決まりました。手術前、ナースから度
々「不安なこと心配なことはありませんか？」
と聞かれました。また、手術の順番待ちの人か
らも心配や不安の言葉を聞かされましたが、私
は、神様とドクターが二人三脚で対応して下さ
る、と確信しておりましたので、何の心配もな
く、当日を迎えることが出来、まさに眠ってい
るうちに手術を受けることが出来ました。全て

お任せする中、手術は無事終了しました。

翌日、集中治療室から病室に戻る時には、少
し痛みはありましたが歩いて帰ることが出来ま
した。抜糸も無事終わり、今後は脂肪分は出来
るだけ減らすように、とのご指導を頂き、足取
りも軽く帰宅。痛みと苦しさにももうろうとして
出た我が家に元気に戻れたことがとてもうれし
く、ありがたいことでした。

術後の主治医の説明では、胆嚢の状態は最悪
で腹膜炎を起こす寸前の状態だったが、他の病
気もなく手術そのものは順調に行うことが出来
た、胆嚢は全部摘出した、とのことでした。そ
して「はい、記念品」と渡されたのは、どす黒
いウズラの卵二つ分ぐらいの胆石でした。エコー
やCTの画像で見たもの以上に実物は大きく

迫力のあるものでした。

自宅に戻り毎日の生活を過ごす中で、記念に頂いたと言うか持ち帰ったと言うべきかこの胆石を眺めていると、あれこれ様々なことが浮か

んできます。これだけ大きい石がどうして出来たのだろうか、どうしたら出来るのだろうか、どのくらいの時間の中で出来たのだろうか、人様から「とても昨日今日などでは出来ないよねー」「立派だねー」などとよく言われます。

あれこれ思うに、私の食生活は脂肪分を十分に摂取するスタイルですから、胆嚢も疲れ果ててしまったのでしょう。更には四十年間の喫煙の中で体内に入った大量のニコチンとタール、この三者が、長い時の流れの中で複雑に関わり、この胆石が作られてきたのではないだろうかと

思うのです。

もちろん食事だけが発症の原因ではありませんが、日々の食生活が人体に与える影響は、大変重いと思うのです。

金光教祖の言葉に「食物はみな、人の命のために天地の神が造り与えて下さるものである」とあり、また「何を飲むにも食べるにもありがたくいただく心を忘れるな」とあるのですが、戦後の食糧事情の悪い時期に育った私は、おいしい物をたくさん食べることに喜びはあつても、感謝とか感動などということとは二の次三の次だったのではないかと、ふと思ひ至るのです。例えば、朝食のトーストにバターを塗るのも、小さじ一杯が標準とするなら、小さじ一杯のバターでなければ満足しない。あるいは無意

識のうちに今食べておかないと、次はいつ食べられるか、と思ったりする。そんな調子で今までを過ごしてきたように思うのです。

そのような生き方は「何を飲むにも食べるにも、ありがたく頂く心を忘れるな」という教えとは、かけ離れている姿ではないか、と気付かされたのです。耳にタコが出来るほど聞かされた言葉でしたが、頭で知っていることと身に付いて知っていることとはおのずと違うという当たり前のことを、この度の入院手術で、少しばかり痛い思いをして教えられました。

退院後、私の心にささやかな変化が起きてきました。それは、食べ物への感謝の思いが、以前とは比べられないほどに、素直に感じられるようになってきたことです。

また、教祖の言葉に、「食物は、わが心で毒にも薬にもなるものである」とあります。かつては、耳障りの良い言葉、としか思っていなかったこの言葉のもつ重さが、今の私にはひしひしと迫ってくるのです。これからは、この教えをしつかりと抱きしめつつ毎日の生活を、さわやかに元気に送りたいと願っています。

神様の手の中で

森本信子

それは今から八年前、主人が三十九歳の時の出来事です。教会での祭典が終わり、私は外でお参りに来られた方々にあいさつをしていました。するとその時「バキ！ ドサ！」と、目の前に青い物、次に白い物がスローモーションのように落ちてきたのでした。どこからか「何か落ちた！」「人じゃ」「あつ！ 浩史じゃ！」と言う声が私の耳に入ってきました。

私は突然のことに「えっ？」と思いましたが、音のした方に目をやるとそれは主人でした。祭典の片付けのため屋根の上にいた主人が割れた

屋根と一緒に落ちたのです。すぐそばに行き「私がつかりせんといけん！」と思い、主人の手を握りながら、心の中で「金光様、金光様！」と神様にすぎるしかありませんでした。主人は何とも言い表しようのないうめき声をあげており、周りの方々が救急車を呼んで下さいました。しかし、なかなか救急車は来ず、その時間はとても長く思えました。その間、小学生の息子に「これから母さん、お父さんについて行かんといけんけえ、母さんのカバン持ってきて！」と私が言った瞬間、子どもは叫びながら走っていききました。後から聞いた話ですが「お父さんが死んだー！」と言いながら走り回っていたそうです。

病院に着くと、先生から説明があり「ろつ骨

が八本、鎖骨が一本折れています。肺には刺さっていません」と言われました。その病院は完全看護だったのですが、どうも気になり、私は付き添わせてもらうことにしました。

その夜、主人は頭が痛いと言うのですが、看護師さんは「熱もないので大丈夫ですよ」とのことでした。

二日目には、主人の妹が、子どもたちを連れて病室に来てくれましたが、子どもたちは主人に会うのが怖かったらしく、なかなか病室に入ろうとしませんでした。「大丈夫だよ」としか言えない私の心の中は不安でいっぱいでした。

その日の夜も頭の痛みを訴えていたので、看護師さんに尋ねると、薬の副作用だと言われました。

そんな時、ふとあることを思い出したのです。

それは、今から十数年前、脳梗塞で入院した母のことでした。最初は意識があつたのですが、何日かすると眠ってばかりいるようになりました。私は最初「しんどいんじゃない？」ぐらいにしか思っていませんでしたが、何日かして「母さん、ご飯食べれる？」と聞いても返事さえしてくれなくなりました。心配になって看護師さんを呼ぶと、すぐに集中治療室に運ばれ、処置をして頂くということがありました。

その出来事が頭をよぎり、私には主人の様子
が母の時と全く同じに見えて仕方なかったのです。

私は担当の先生に「ずっと頭が痛いと言っています。様子もおかしいんです！」と必死で訴

えました。「とりあえずレントゲンを撮りまし

よう」と言われ、お任せするしかありませんでした。すると廊下で待っている私の所に先生が来られ「これからもう一つ検査をしますが、もしかすると頭を切ることになるかも知れません。病院を替えようと思いますがどうされますか？」と言われた時、もう私の頭の中は大パニックになりました。

結局転院が決まり、病院に着いた途端、先生に呼ばれ、開口一番「すぐに手術をします。もう準備は出来ています」と言われました。検査の結果は、脳挫傷と頭蓋骨折でした。

何がなんだか分からない状態でしたが、その先生の説明を聞いてるうちに、気持ちが大んだん落ち着き「これで助かった」と心の中でつぶや

いていました。

手術が終わり、担当の先生からの説明では「大変難しい手術でしたが、何とか成功しました。もう大丈夫です」と言われました。私は、先生にお礼を言い、部屋を出ると同時に、今までの緊張がとけ、腰が抜けてしまいました。

その数時間後、私は主人に会うのが怖く、恐る恐る病室に行くと、少し気取ってうれしそうに、奇麗な看護士さんに食事を食べさせて頂いている主人がいました。

「人の気も知らんで……」と思いましたが「良かったあ」と、胸をなで下ろしました。その日は待合室に泊まりましたが、眠ることは出来ませんでした。次の日の朝、病院の待合室の窓から見た朝日はとても美しく、私は「神様ありがと

うございました」とお礼を言いました。

私は時々あの日のことを思い出しながら空を見ます。

今ではあの時のことを忘れ、つまらない夫婦げんかをしたりしている毎日です。今思えば、神様は主人の様子がおかしいことに気付かせて下さったり、いろんな方々の祈りや助け、家族の協力などたくさんの方々のつながりの中で支えられて、主人が今も生かされているんだなと思え、神様がそばにいて守って下さっているのだなと感じるのです。

皆さん、ふつと空を見上げてみませんか。晴れていても曇りでも何となくホッとしませんか。そこに何かがあるのかもしれないよ。

神心と人心

荒谷光一

先日、出張先で仕事を済ませた後、帰りの切符を買おうと思い、駅の中にある窓口へ行きました。そこは大変小さな駅で、窓口も一つしかありません。並んで待っている人が四、五人いて、列の先頭では、背の低いおばあさんが切符を買っているところでした。「あーあ、こんなに並んでいたら、すぐの電車には乗れないかなあ」。そう思い、並んで待っていると、そのおばあさんが窓口でいろいろと質問しているのが聞こえてきました。電車での旅行に慣れていないようで、乗り換えのホームや時間などについ

て、いちいち細かく質問していたのでした。

聞こえてきたその内容は、極めて常識的なものでしたので、「えーっ、そんなことも分からないのか」と思いながら、おばあさんの次に並んでいた中年のご婦人にふと目をやると、案の定、イライラした様子を見せています。私は、「ああ、やっぱりな。ほんと早くしてほしいよなあ」と、そのご婦人に共感していました。すると次の瞬間、そのご婦人がいきなり、「それはあの時刻表を見て、ご自分で調べればいいですよ」と、丁寧な言葉ではありましたがきつぱりとした口調で告げると、おばあさんを強引に脇へ押しやり、すぐに自分の用件を係員に向かつて話しました。相当急いでいたのでしょうか。あるいは、長い時間待たされていた不満

が爆発したのかもしれない。私はあつげにとられて見ていました。

一方、脇へ押しやられたおばあさんの方とはとうと、反撃にこそ出ませんでした。ものすごい形相でそのご婦人をにらみつけて、「分からないから聞いているのに」と小声でつぶやきながら、なおもしばらくの間、ムツとした表情を相手にぶつけていました。最初に目にした不安げな表情からは想像も出来ない怖い顔でした。

そうこうしているうちに私の順番が回ってきて、予定通りに切符を買うことが出来ました。電車に乗るために改札口へ向かおうとすると、先程のおばあさんが、時刻表を見たり周りをキョロキョロしたりしながら、困ったような様子

を見せています。「ああ、やつぱりまだ分かっていなかっただのか。よし、教えてあげよう」と思いましたが、すぐその後、「いや、待てよ。ここで関わってはいけません、こっちは電車に乗り遅れるかもしれない」との思いがよぎりました。そのときです。私の心に、ある出来事が思い浮かんだのです。

少し前の冬、スーパ－の駐車場を出ようとしていた時のことです。吹雪で視界が悪い中、一台の車が行く手を遮っていました。「どうしたんだ、早く車を動かせよ」とイライラしながら見ていると、その車はバックで駐車しようとしているようでした。ところが、運転に慣れていないのか、ちよつと動いたと思つたらまた戻つたりして、なかなか駐車が出来ません。そして、

あと少しでこちらが通れるくらいのところで、その車は止まってしまいました。「なにやってんだよ！ さっさとしろよ」イライラが最高潮に達していた私は、車一台が通れるか通れないかくらいのわずかな隙間に向けて、車を前進させました。ギリギリで通り抜けたかに思われたのですが、止まっていたその車とわずかに接触し、車に傷を付けてしまいました。相手の人は車を降りて、ものすごい剣幕で、やはり車を降りた私を責め立てます。「モタモタしていたのが悪いんじゃないか」。私は内心そのように思いましたが、向こうの車は完全に止まっていたので、反論は出来ません。じっと我慢して怒られ続けました。

後で心が落ち着いてから、自分の考えと行い

を振り返ってみました。あの時、最初、私の心には、「困ってるみたいだな」という思いが浮かび掛けました。ひどい雪の中、後ろ向きに駐車するのは大変です。お年寄りかもしれません。運転の苦手な人かもしれませぬ。「気の毒になあ」という思いが、私の心に湧きかけました。しかし、そんな思いは、「こっちは急いでいるのに」という思いの前に、形になる前に消え去ってしまったのです。

金光教の教祖は、「かわいそうにと思う心が、そのまま神である」と教えています。人は誰でも他人を思いやる心、神心を持っているのです。そして同時に人は、自分の理屈や都合で神心を打ち消してしまう心、人心も持っています。「よし。次は神心でいくぞ」と私は決意したのでし

た。

困っているおばあさんを見ながら、私はこの決意を思い出したのです。私は、心の中で神様をお願いしながら、思い切って、「どうかしましたか？」と声を掛けました。「この電車に乗りたいたいけど、よく分からなくて」と言われたので丁寧に教えてあげました。おばあさんは、打って変わって明るい表情になり、「どうもありがとうございます」と、ニコニコしながら何度も頭を下げてお礼を言われました。

私は、とてもうれしく、温かい気持ちになりました。そして、すがすがしい思いで改札口に向かったのです。

まだまだ人心が前に出やすい私ですが、そうであるからこそ、困っている人を見て「気の毒

に」と思う素直な気持ちを大切にしていき、自分の神心を育てていきたいと思えます。それは、とても小さなことですが、同時に、この世の中に、人を思いやる気持ちをほんの少しでも生み出していくことは、とても大きな意味を持っているのではないかと思うのです。

認知症の祖母と暮らして

谷口光江

私は現在三十歳で、去年結婚し教会で生活をしています。振り返ってみると、私の二十代は何かと介護に関わりながらの毎日でした。

専門学校では介護を学び、その後、介護職員として施設で働きました。

施設では、認知症が進んでいる方のおむつを交換しようとした時、急に暴れだして、その方にみぞおちを蹴られて呼吸が出来なくなったり、つねられたりたたかれたりして体にあざが出来るとような日もありました。身体に麻痺がある方は、一人でベッドへ移動するのが難しく、

ナースコールで呼ばれる度に走っていきました。また、利用者と家族の間に入って話をしたりと、忙しい日々を過ごしていました。

数年後、私は仕事を辞め、認知症が進み出した祖母のお世話を自宅ですることになりました。母と一緒に祖母を病院へ連れて行ったり、デイケアサービスを受けるための準備や、入浴の介助などをしていました。

そんなある日、祖母がデイケアで家にはいない時、祖母の衣替えをしました。帰ってきた祖母はタンスを開け、「誰が服をどこに持って行ったんで？ 光江さんかっ！」と怒り出し、その日から、「財布がない。あんたが持って行った」と、何に対しても私のせいだと決めつけ、「違う」と言っても聞いてくれませんでした。

私は祖母のために、としたことが逆に責めら

れる結果となったことにショックを受け、怒り出す祖母に自分のたまらない思いをそのままぶつけることもありました。でも、自分が怒れば祖母が助からなくなると思い返し、走って自分の部屋に行き、ふとんの上で声を出して泣いた時もありました。両親も祖母が分かるように話をしてくれましたが、それでも祖母は怒り、暴言や物を投げたりしました。

そういう日々が続いたある日、祖母を病院へ連れて行くと、看護師長さんが私の話を聞いてくれました。すると、「おばあちゃんは一番言いやすいあなたに自分の思いをぶつけているのよ。それに、認知症の人は変わらないから、こちらが変わらないといけないのよ」と話してく

れました。

その時、金光教のある先生が、「人間は自分ではなく相手を変えようとする。相手ではなく、自分が変われば相手も変わる」と教えて下さった言葉が思い浮かびました。教えてもらっていてもなかなか出来ていなかった自分や、祖母を変えようとしている自分たち家族の姿が初めて客観的に見え、うまくいかなかった原因が祖母にあるのではなく私たち家族にあるのでは、と思えてきました。そして、祖母は、私のことを信頼し、やり場のない自分の思いをぶつけているのだから、祖母が穏やかに過ごせますように、私たち家族が祖母のありのままを受け入れることが出来ますように、と神様をお願いするようになりました。

それからは、祖母との接し方について、両親ともよく話し合うようにし、一人が感情的になつた時には他の二人が、「おばあちゃんは認知症なんだから悪気はないのよ」となだめました。それでも、祖母の言葉に腹が立ってたまらない時は、「祖母の言葉に腹が立ちます。このままではお互いに助かりません。祖母のことをありがたく思える自分にならせて下さい」と神様に願っていました。

そのうち、祖母の状態は次第に落ち着きを見せ始め、家族の間柄もおかげを頂くようになりました。

介護の仕事をしていた時は、一人のお年寄りに対して医療面、リハビリ面、介護面などの専門的な立場から見て、みんなと話し合いながら

関わっていました。しかし、家での介護はとても閉鎖的で、休む間がなく、家族としての感情も出て、心身ともにきつい時があることを分かってもらいました。家族で診る介護には限界があります。ケアマネージャー、お医者さんなど、様々な方のお世話になり、お年寄りや私たち家族は支えられて在宅介護が出来るんだということ、このことがどれほどありがたいことかを実感しました。

この経験を通して“介護”と言っても置かれた立場によつてそれぞれの大変さ、ありがたさがあることを知りました。もし私が、学生の時や、そして仕事での介護しか経験していなかったら、在宅介護をされている人の苦しみは理解出来なかつたように思います。私は“在宅介護

は仕事の介護より楽、という見方をしていたのかもしれない。

人間は自分の立場でしか物事を見ず、他の人の立場は分かりにくいものです。しかし、神様は今の世の中の介護という問題について、私をいろんな立場に立たせて下さり、様々なことを教えてくれたように思います。

私の結婚が決まった時には祖母が、「結婚式には絶対に行く。神様に孫の結婚式まで命を下さいとお願いしているから」と目を輝かせて言ってくれました。今まで葛藤してきた日々がこの言葉で報われ、涙が止まりませんでした。

結婚式当日、祖母は白無垢姿の私を見て涙を浮かべ、手をたたいて何回も、「良かったね」と言ってくれました。

祖母の介護は苦しい時があったけれども、この経験をさせてもらえて良かったと思える時間を、今神様が下さっています。嫁いだから祖母の介護に関わることはあまりなくなりましたが、家族みんなが仲良く楽しく過ごせますようにと祈っています。

親の祈り、神様の祈り

松田齋二郎

のです。

そして、そのことを知った先輩が、見かねて病院へ連れて行ってくれたのでした。

診断の結果は、「 Dengue 熱」という感染症。

「ドーン！」
ハンマーでたたかれたような衝撃が、私の頭を突然襲いました。

間もなく高熱にうなされ、身体の節々が痛み、口にしたものを吐き出したのです。そして顔は赤黒く腫れ上がりました。

これは、私が出張先のフィリピンから帰国して数日後のことでした。当時三十一歳だった私は、東京で一人暮らしをしていました。今までに経験したことのない痛みと症状に見舞われ、三日間、飲まず食わずのまま部屋で倒れていた

出張先で気付かぬうちに蚊に刺されて感染したようです。しかも私には、血液中の血小板が減るといふ持病もあつて、病状を更に深刻にさせていたのでした。

血小板は、止血の働きがあります。しかしこの Dengue 熱によつて血小板が減少して出血を引き起こし、それが顔一面に赤黒い斑点となつて現れたのでした。もし、これが頭の中だったら命に危険を及ぼすため、その場で即入院となりました。

私が、三重県熊野市にある実家の教会に電話

をすると、母は特別驚いた様子もなく、「神様に祈っているから大丈夫」と励ましてくれました。ところが私との電話を切った後、母はすぐに病院へ電話を掛けたのでした。やはり心配だったのでしょうか。お医者さんは、「お母さん、よければ来てあげて下さい」と言われたそうです。母も、「これは、放っておけない」と思い、翌日には病院に来てくれたのでした。

母は、私を見るなり笑顔で話し掛けてくれました。思ったよりも元氣そうな私に安心したのか、いつもの穏やかな表情に、優しい笑みをたたえていました。まるで私の身を案じていないかのようにさえ見えましたが、いつもと変わらぬ母のその姿が、心細かった私を和ませてくれたのです。

しばらくして、母は廊下で担当のお医者さんと話をしていました。話も終わり、ニコニコと病室に戻った母に向かって、「何を話してた？」と尋ねると、「あなたの血小板の病気のこと」と答えます。

「で、治るって？」と聞くと、

「それが治らないって。だけど、『松田さんの場合は、軽くて良かったですよ』とおっしゃってくれてね」と、またニコニコと笑います。

お医者さんは、「治らない」と言っているのに、「軽くて良かった」と喜ぶ母。ともすると、こういう時は悪く考えるものですが、「軽くて良かった」と喜ぶ母の姿に、この時どれほど勇気付けられたか分かりません。人の心を救うのに、大げさな励ましも、特別な知識や技術も、

ましてや、奇跡を起こす魔法もいらないうんだなあと、つくづく教えられたのでした。

そして入院三日目の朝のこと。洗面所で鏡を見た瞬間、全身に電気が走ったような驚きを感じたのです。

「誰だ、こいつは？」

鏡に映った私は、赤黒い腫れも少し治まり、元の私に近い姿が映し出されてはいるのですが、なぜかその時は私ではないように見えたのです。とっさに、「あつそうか！ 私は死んでいたのか！ それが母の祈りを受け、死ぬところを神様に助けて頂いたんだ！ そうか！ 私は生まれ変わったのか！」との思いが湧き起こってきたのです。

病室に戻るとジワジワと喜びが込み上げ、止

めどなく涙があふれてきました。「親の祈りの中で、生かされていたんだなあ」との思いが募り、ただただ、「ありがとうございます。ありがとうございます」といって、感謝の言葉しか出てきませんでした。そして、この日を境に、みるみる快方に向かつていったのでした。

すっかり気分も良くなってきた入院五日目。母が熊野に戻る日が来ました。私は、「心配掛けたね。来てくれてありがとう」とお礼を言いました。別れがつかない病室から見送ろうとしました。別れがつかないか母は泣いていました。私は、もう一度、「もう大丈夫やから。心配せんといて。ありがとう」と言うと、今度は、「何も心配してないよ。ただ、病室から出たらあんな顔が見えんようになる。母さんは、それが悲しいんや」と、また

ポロポロと涙を流したのです。

廊下の向こうに母の姿が見えなくなるまで見送った後、ベッドに戻ると、今度は私の涙が止まりませんでした。親というのは、なんてありがたいのだろう。ここまで深い愛情で私のことを思ってくれているのか。苦しんでいる私の姿を見ては、笑顔で包み込み、元気を取り戻した私の姿を見ては、涙を流して喜んでくれる母。

私は、こうした母の姿を通して、神様に触れたような気がしました。金光教の神様は、「人はみな神の愛し子」といって、人間をわが子として慈しみ助けて下さる“親神様”だといわれています。一人ひとりを私の母と同じ思いで、祈り続けて下さっているのだと気付かされたのでした。

あれから十二年。私も結婚して実家の教会に戻り、一人の子の親にもなって頂きました。見よう見まねで神様に手を合わせている娘の姿を目にした時、私は言い知れぬ喜びを感じるのです。そして母も、信心をする私の姿に、喜びと安心を感じてくれたのかと気付いたのです。

親神様の温かく大きな懐の中で生かされて生きる喜びに、いつの日か娘も気付いてくれればと、今は、亡き母がしてくれたように、私も娘のことを祈らずにはいられないのです。

KONKOKYO

金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 719-0111

岡山県浅口市金光町大谷 320

【電話】 0865-42-6453

【FAX】 0865-42-2114

【メール】 w-master@konkokyo.or.jp